

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 森下 嘉之

【所属】(助成決定時) 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

【研究題目】 東欧と日本の高度成長期における大規模住宅団地の比較研究

【研究の目的】(400字程度)

社会主義期(1940年代末～1989年)を象徴するソ連・東欧の大規模団地は、日本の歴史研究においてはほとんど取り上げられてこなかった。こうした研究の欠如が生じる背景には、日本の東欧地域研究において、社会主義時代を歴史的・社会史的に扱う研究がすすめられてこなかったことがあげられる。四半世紀前に「葬り去られた」社会主義時代を、今一度、イデオロギーではなく歴史的に問い直すことが求められている。本研究は、社会主義期の東欧諸国の象徴ともいえる大規模住宅団地が、どのような意図をもって建設され、社会主義の国家建設にあたってどのような意義を有していたのか、そして、団地住民がどのようなコミュニティを構築したのかを、日本との比較を通して明らかにするものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

申請者の研究計画は、以下の3点に基づいて作成される。

- ① 「住宅」「団地」というフィールドでは、歴史のみならず社会学や人類学、建築・都市工学などのあらゆるディシプリンを通しての分析が可能であること。
- ② 「住宅」というフィールドでは、「建築」「都市計画」の方法を通しての分析が不可欠であるため、文理融合の可能性を秘めていること。
- ③ 社会主義期東欧の住宅建設においては、「環境問題・政策」が非常に重要なファクターであり、異分野融合による分析が不可欠であること。

これら3点の問題に取り組むために、本研究は、東欧社会主義国中でも最も工業化が進み、西側諸国とも歴史的に深いつながりを有していたチェコスロヴァキアを事例に、同国で展開された大規模住宅団地の建設過程を明らかにする。

本研究はチェコスロヴァキアの団地住民の政治意識を、当時団地内で刊行されていた機関紙を通して分析することで、住民たちが社会主義体制をいかに受容していたのか、1989年の東欧革命に至る過程で、どのように政治意識を変容させたのか、その一端を明らかにする。これらの手法を用いることで、社会主義体制の崩壊の要因を、政治・経済面のみならず、団地コミュニティの「内なる生活」の中から探り出すことが可能となる。

【結論・考察】(400字程度)

申請者は上記の研究計画に基づき、助成期間内にチェコスロヴァキア・プラハ市で1970-80年代に建設された大規模住宅団地に関する新聞史料等を現地の文書館・図書館にて収集した。本史料を用いて分析を行った結果、プラハの社会主義団地における住民コミュニティ、都市計画の問題点、さらに共産党の都市政策に関する一定の成果を得ることができた。他方で、本研究をさらに進めるためには、新聞史料にとどまらない多様な史料の必要性、とりわけ、現地住民からの聞き取りも含めた総合的な調査が必要であるということが明らかになった。また今年度は資料及び時間の関係から、日本との比較に着手することがかなわなかった。本研究は社会主義期チェコスロヴァキアの住宅団地を事例としているが、住宅を通して社会主義期東欧の社会生活・文化に迫ることが、今後の課題となる。